

# みんなのこうえん ～インクルーシブな社会を構築するために

## 1. 要旨

私は、コロナ禍のステイホームと1年半前に読んだ新聞記事をきっかけに、公園に着目するようになった。今回、インクルーシブ公園についての事例研究や、公園の遊具や遊びについてのアンケートを実施した。それらを基に、わたしの考える「様々なニーズの人が集まり、インクルーシブな社会を構築するための公園」を提案する。

## 2. 研究のきっかけと目的

私は陸上部に所属しており、長距離走の選手である。コロナによる自粛期間中はステイホームが掲げられ学校が休校になり、部活動も自粛を求められたことで、戸外で練習できる機会が少なくなり、困っていた。学校の校庭や競技場などの練習場所を確保することが難しい状況であったため自主練習として、私は川沿いのサイクリングロードや自宅付近の道路を走ることにしたが、練習として走るだけではなく、街やそこで過ごす人々の様子を観察することも楽しみになっていた。川沿いを走っているだけでも景色は日々変化し、そこにいる人々はどこから来て、何をしているかを考えたりするのもランニングの醍醐味のひとつになった。特に人々の憩いの場になっている公園は、曜日や時期、時間によって全然違った人たちが集まって来ることに興味を覚えた。こうして、私は街の風景に興味を持ち、公園の持つ役割やそこに集まる人々、そしてまちづくりに関心を持つようになった。

ちょうどその頃、「若手建築士と考えるこれからのまちづくり」というテーマで建築士の方々のお話を聞く機会があった。その中に、「ときに建物はその周りに溶け込んで、そこにある問題点を解決する」という話があった。例としてあげられていたのは、2016年にリニューアルオープンした南池袋公園だ。この公園は、池袋という人や建物がごった返す中にあり、戦時中は犠牲者が埋葬されたり、多くのホームレスもが存在したりする暗い雰囲気のある公園だった。しかし、再開発によって遊具やダイニングカフェ、広い芝生がある開放感のある公園になってからは、人々が引き寄せられるように公園を訪れるようになったということだった。建築家の考えたまちづくりが街を変えたのだ。これを知って、私もこのように社会を変えるための公園をつくりたいと考えるようになった。

「私が作りたい公園はどんな公園だろう？」と考えたとき、すぐに思い浮かんだのが、「障がいのある人も子ども達も社会の全ての人々が集う公園」だった。

私の家の目の前には、障がいのある人が入居し、働いている施設がある。私の利用するバスの路線では、車椅子の方が乗り降りすることは日常的な風景である。普段、私達は施設内に入ることは出来ないが、毎年開催される施設の夏祭りでは、縁日やゲーム大会を入居者の方々とともに楽しみ、交流をすることができると。また、私の町内会では町内会の盆踊り大会では、盆踊りの輪の中に車椅子に乗った踊り手が複数入り踊りを楽しんでいる。地域の人々がたくさん集まり、施設の入居者も地域住民も自然と会話をしたり、踊ったりと楽しく過ごし、最後にかき氷の列にならぶのが夏の風物詩である。最近は新型コロナウイルスの影響で、盆踊り大会は開催されていないが、それが、わたしの住む街の日常であった。このように、共通の目的を持って集まってくるのはお祭りではなく、例えば公園でも良いのではないかと考えた。

1年半前に、近隣の神奈川県藤沢市が市内の「秋葉台公園」にインクルーシブ遊具を設置したという新聞記事を読み、私は強く興味を持った。詳しく知りたいと思い、インクルーシブ遊具について調べてみることにした。「インクルーシブ」とは包括的などという意味で、この場合はハンディキャップや健康状態に影響されずに、全ての子どもたちはが一緒に遊べる遊具という意味だった。その後、調べていく中で中学2年生の時に在住している平塚市の34次平塚青少年海外派遣団として訪れたアメリカのローレンス市の公園ことを思い出した。ローレンス市の職員の案内で訪れたのは、インクルーシブ公園（写真①）であった。当時はインクルーシブ遊具のことを知らずに「車椅子でも遊べる遊具」と聞いて遊んでいたが、今思えば、ロー



写真①

レンス市が障がいのある子もいない子も一緒に遊べる環境を提供した最先端の公園に私達は案内されて楽しんでいたので。

インクルーシブ遊具は、私が興味を持って調べ始めた2021年春頃には、日本では3つの公園にしか設置されていなかった。しかし、現在では東京都でもインクルーシブな社会の形成に向けてのガイドラインが整備されるなど広がりを見せ、インクルーシブ遊具は身近なものになろうとしている。

インクルーシブな社会を実現するには、幼い頃から多様性に触れる機会が多くあることが重要ではないかと私は考えている。インクルーシブ遊具に触れて、同じ場所で障がいのある子もいない子も遊んでいれば小さい頃からさまざまなニーズの人と関わって相手への偏見は少なくなり、インクルーシブな社会が形成されるのではないだろうか。そのため、子供たちが必ず行く公園でインクルーシブ遊具に触れて、子供たちが同じ場所で同じ時間を共有して多様性に触れる機会をつくと良いのではないかと考えた。そのため私は、私が考える公園にインクルーシブ遊具を設置し、遊具を通して多様性に触れる機会を増やそうと考えた。一方で、公園に遊具を配置するだけでその目的は達成されるのかという疑念もわき上がってきた。そこで、私はインクルーシブ遊具を配置した公園がその機能を十分に発揮することのできるような空間を提案設計することにした。

### 3. 研究方法

#### 3.1 日本国内の事例調査

私がインクルーシブ遊具を知った時、国内でインクルーシブ遊具を設置している公園は3つしかなかった。日本で初めてインクルーシブ遊具が設置されたのは2020年3月、東京世田谷区にある砧公園の「みんなの広場」だった。わたしは、まず近くて行きやすいところの調査からはじめようと考え、近隣の公園から調査を開始することにした。



写真②

##### 3.1.1 秋葉台公園(神奈川県藤沢市)

この公園は私の住む平塚市から車で30分ほどの場所に位置し、私がインクルーシブ遊具について知るきっかけとなった公園だ。藤沢市は「誰一人取り残さないまち」を目指している。この秋葉台公園は開園当初よりバリアフリー仕様だったが、老朽化した遊具が撤去され、2021年3月にリニューアルオープンに伴い、新しくインクルーシブ遊具が設置された。



写真③

私が夏に訪れた時は、小学校低学年くらいまでの子供が多く遊んでいた。この公園は運動公園であるため、夏はプールに行った帰りの人たちが来ていた。冬にはイベントに参加した後の子どもたちが楽しく過ごす様子があった。私はこの公園に幼稚園生と小学2年生の従兄弟と共に行くことがあったが、車椅子のまま乗れるスイング遊具(写真④)やいろいろな体勢で乗ることが可能な回転遊具で遊んでいると見知らぬ子どもも乗ってきて、初対面にも関わらず一緒に会話をして楽しむことができたようだった。また、スイング遊具は補助の大人も乗れる仕様になっていたため、私も一緒に乗っていたところ、一緒に遊んでいた子の母親が来て、私と会話することとなった。このようにインクルーシブ遊具を一緒に利用することで、初対面の大人同士の会話も生まれることもあると分かった。

##### 3.1.2 としまキッズパーク(東京都豊島区)(写真④、⑤)

2020年9月にイケ・サンパークの隣に作られた。IKEBUS(豊島区内を走る真っ赤なバス)を監修した水戸岡鋭治氏がデザインし、小学校低学年までの子供や障がいのある子ども向けとなっている。この公園は入り口が1つで、敷地が柵で囲われているため、子供が誤って外に出てしまう心配がない。また、遊具があるだけでなく、屋根のついたスペースにはミニ図書館がある。他にも、親子で楽しむことのできるミニSLや後ろに仲間を乗せて走ることができる三輪車などの乗り物や東屋があったり、移動できる砂場などオリジナルの遊び場があったりしている。この公園の近くには大型商業施設があり、大きな駐車場も備えているため、大型バスで養護学



写真⑤

校などが校外学習で来ることもあるそうだ。私が調査に行った日には子ども会の団体が来ていた。

この公園のデメリットとして、年齢の上限が定められた遊具も多くあり、小学生でも遊べないものがあることと、この公園には敷地内に駐車場がないという2点が挙げられる。

### 3.1.3 うみどり公園(岩手県宮古市)(写真⑥、⑦)

この公園は2021年8月に開園した。旧宮古市役所があったのだが、2011年東北地方太平洋沖地震による津波で被災し、2016、2019年の台風でも庁舎は水没した。市役所が度々水没すると災害時の市役所の機能を十分に果たすことができないという理由で、内陸部に市役所を移転した。市役所跡地の利用法については、市と市民とで議論を重ね、当時の宮古市にはない大きい公園がほしいという意見をもとに、大規模な公園をつくることにした。公園の設計段階で市役所の都市環境課が行ったりサーチの中で、「インクルーシブ遊具」に関する情報に出会い、東北地方にはないインクルーシブ公園を設立することになった。

この公園は遊具だけではなく、バスケットゴールも設置されている。私が訪れた時には夕方になると中高生の若者がバスケットボールを楽しんだり、友達と数人でおしゃべりしたりするために集まっていた。健康遊具もあるため、中高年世代も体を動かしていたりと幅広い年齢層の人々が来ていた。取材のために市役所を訪問したが、職員の方は、バスケットボールはこの公園がオープンする時のイベントでプロの選手を招いてゲームをしたことが、若者によるバスケットコート継続的な利用につながっていると分析していた。また、おしゃべりをするための憩いのスペースでは、数多く配置されたベンチや東屋が人々を惹きつけるのに役立っているということだった。

交流の場としての手法は、遊具を設置することだけではないことがわかった。

### 3.1.4 平塚総合公園(神奈川県平塚市)

この公園のインクルーシブ遊具は、まだ解放されていないが今年2022年12月に完成予定だ。市役所に取材をしたのだが、この遊具は平塚市の市制施行90周年の記念にふさわしい提案を市役所内で募集したところ、インクルーシブ遊具の設置を計画していた緑公園課と福祉課が合同で庁内のコンペに出したそうだ。この遊具をつくる際には市役所は市内の特別支援学校や障がいを持つ子供がいる親などにインタビューを実施して、遊具を置く場所や置く遊具などを検討したそうだ。当初、遊具の設置場所の候補は、駐車場や多目的トイレがあることから別の地域の公園が候補に挙がっていたが、市民対象のインタビューの中で、街の端に置かれると疎外されている気がするという意見があったため、街の中心に近い総合公園に置くことになったという経緯がある。また、平塚市はこのインクルーシブ遊具の設置工事に当たってクラウドファンディングを行った。目標は、総工費1億5000万円の約3%にあたる500万円だったが、実際は約25%ほどに当たる1,296,500円しか集まらなかった。



写真⑥



写真⑦

## 3.2 一般的な遊具の事例調査

### ◆滑り台

滑り台には、平衡感覚や外からの力に対応する能力を獲得できる効果がある。子どもには人気のある遊具の一つだが、一般的な滑り台は登り口が狭かったり滑る際に上にあるバーが邪魔になったり保護者が付き添うのは難しい。

### ◆ブランコ(箱型)

ブランコには、バランス感覚や動作の調節力を獲得できる効果がある。子どもたちに大人気の遊具であり、幼少期から小学校高学年児童までが楽しめる遊具である。箱形ブランコは、以前はどの公園にも設置されている一般的な遊具であったが、2000年頃から多くの事故が起こったため現在はそのほとんどが撤去されている。

### ◆ジャングルジム

ジャングルジムは、全身運動や考える力を獲得する効果がある。遊具の中を昇降したり、くぐったり、頂上で天を仰いだりと多様な楽しみ方のできる遊具である。ジャングルジムは遊具を構成する棒の間隔が狭く、保護者が付き添うことが難しいという欠点もある。

## ◆シーソー

シーソーには、リズム感覚やバランス感覚を獲得する効果がある。二人で操作する遊具であるため、コミュニケーションの基礎を獲得する効果もある。ぶら下がりシーソーや回転シーソーは事故が多いため、近年の小学校や公園では撤去されていたり、支点のバーだけ残されていたりすることが多い。

### 3.3 海外の事例調査

インクルーシブ遊具のはじまりは、1985年アメリカのロナルド・メイス博士が提唱したものだ。これをきっかけに遊具のユニバーサルデザインを目指していったのだが、特にアメリカではADA法（障害のあるアメリカ人法）があるため、公園が改善されていった。海外のインクルーシブ公園はインクルーシブを全面的に売り出していないところもある。例えば、オーストラリア・クイーンズランド州のケアンズにあるインクルーシブ公園ではそれとは知らずに良い遊び場を見つけたと思って遊びに来ている人が多いそうだ。

「公園の入り口脇に、遊び場を紹介するささやかな看板があるのですが、見過ごされることもしばしば。ユニバーサルデザインの公園は、さりげない工夫であらゆる子供にとって魅力的な遊び場を目指しているため、利用者の中にはこうして、ただ『楽しい遊び場!』『そういえばいろんな子供たちがあそんでるなあ』といった認識の方も少なくないのです。」（みーんなの公園プロジェクトより）

### 3.4 アンケート

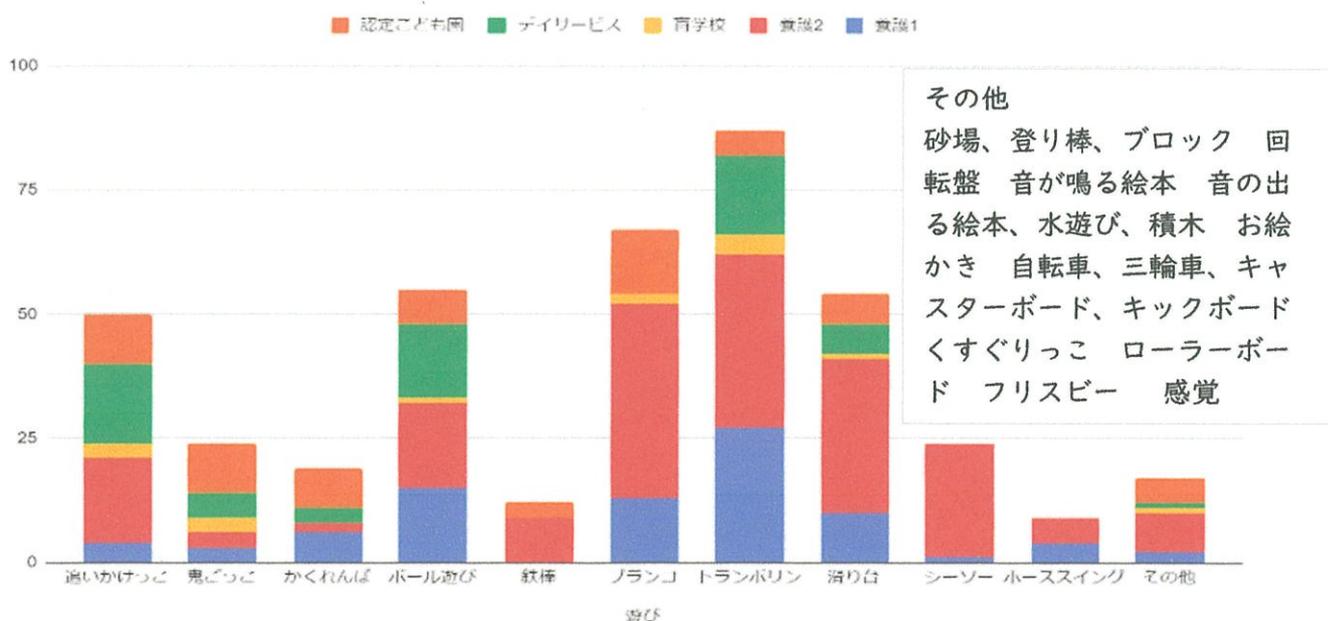
#### 3.4.1 理想の遊具に関する教師対象のアンケート

以下の教育施設の教師を対象にアンケートを2022年8、9月に行った。対象は養護学校1（肢体不自由部門と知的障害部門を併設）、養護学校2（知的障害のみ）、盲学校（視覚障害）、日中デイサービス（児童発達支援）、認定こども園（健常児が多い）（以下養護1、養護2、盲学校、デイサービス、認定こども園）である。ろう学校はアンケートをとる予定だったが、耳が聞こえないだけで他の子どもと変わらないので特別なアンケートに答える必要はないという回答で、調査には至らなかった。アンケートの意図が十分に伝わっていない可能性もあるので、研究の成果をお伝えしようと考えている。

#### Q1 子どもたちはどんな遊びが好きか（複数回答可）

##### グラフ①

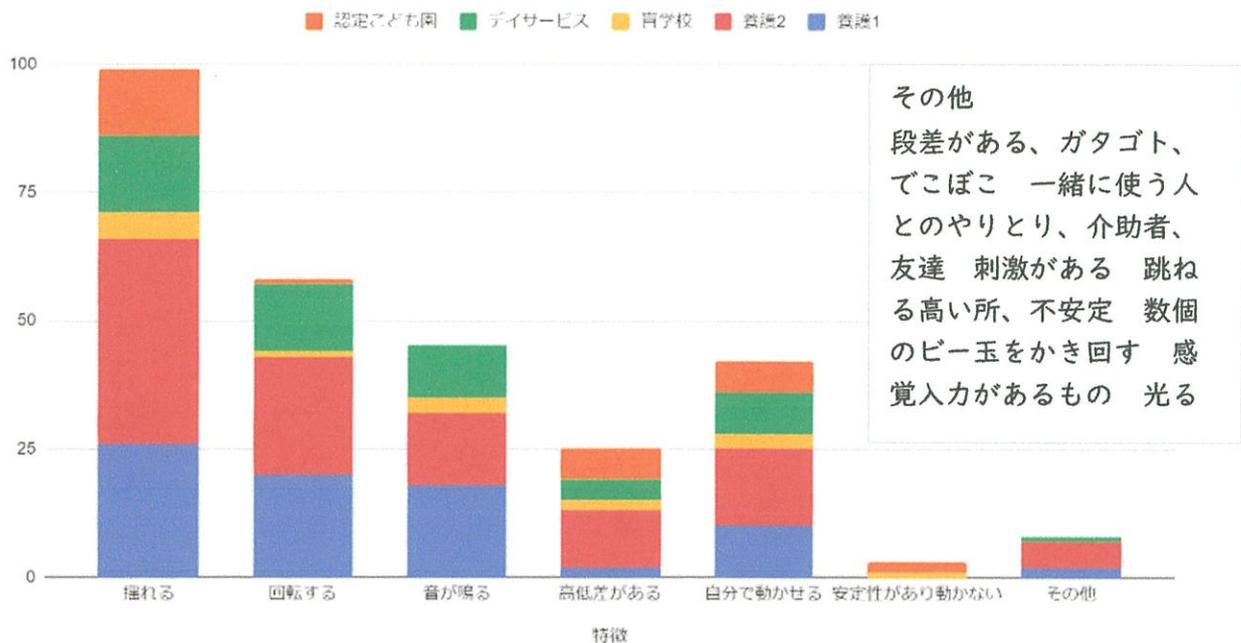
生徒が好きな遊び



## Q2 子どもたちに人気の遊具の特徴は何か?(複数回答可)

グラフ②

生徒に人気の遊具の特徴

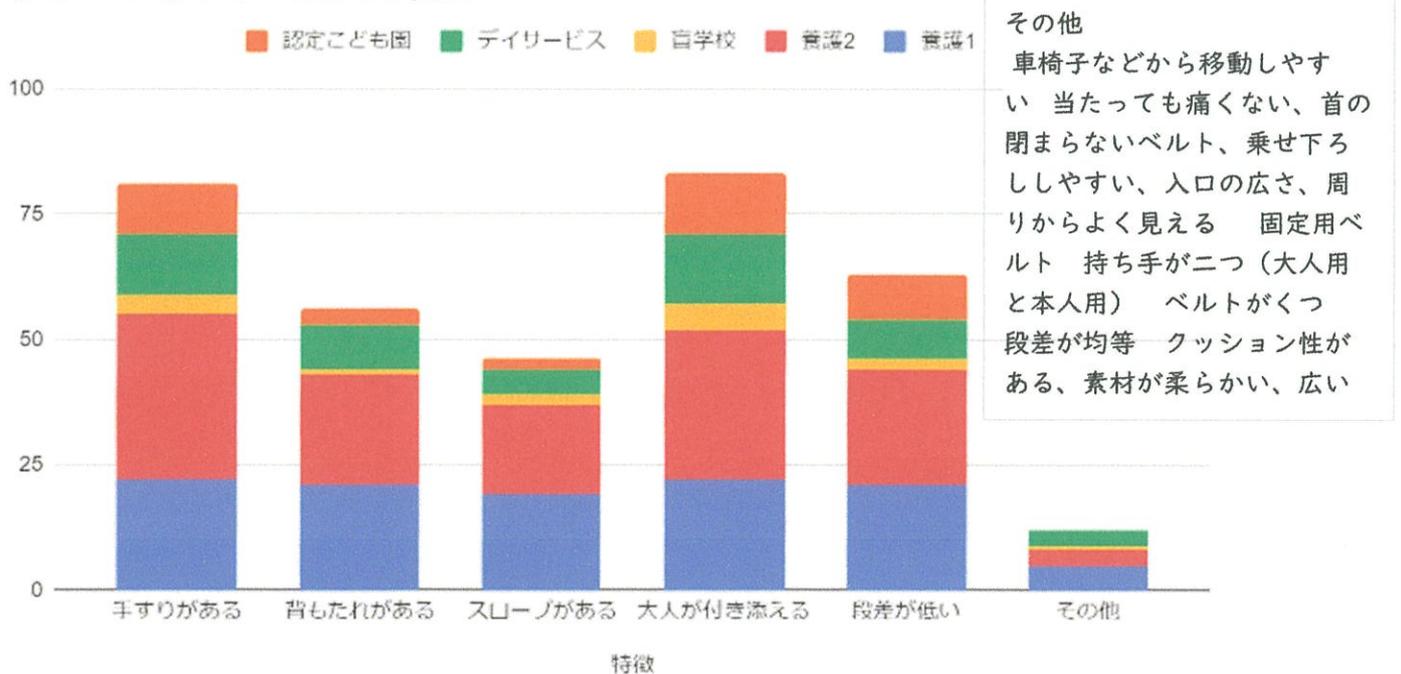


## Q3 サポートが必要な生徒の場合、どんな遊具がサポートしやすいか (複数回答可)

グラフ③

グラフ③

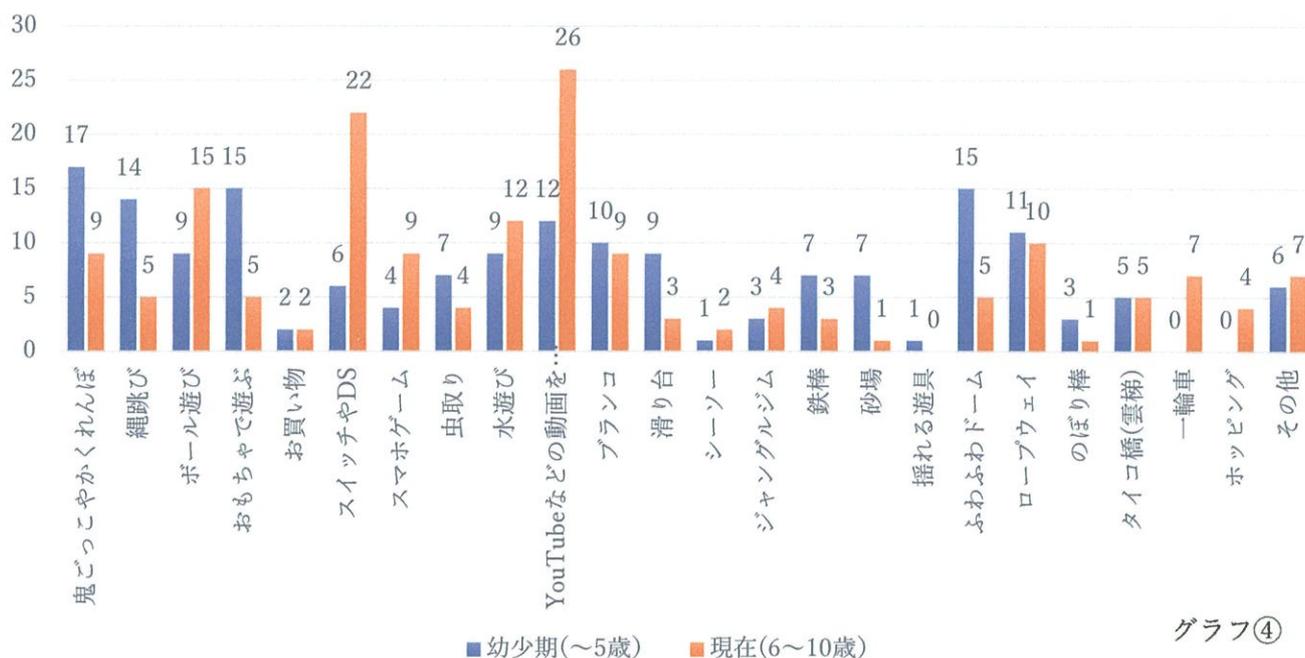
サポートしやすい遊具の特徴



### 3.4.2 好きな遊びに関する子供対象のアンケート

私が通所していた学童保育(小1~小4)で幼少期に好きだった遊びと現在好きな遊びについての調査を選択肢から3つずつ選んでもらった。

## 好きな遊び



グラフ④

### 3.4.3 考察

ふわふわドーム（トランポリン）は特別支援学校で行ったアンケートでは人気が高かったが、幼稚園では設置されていないせいか人気が低いという結果になった。しかし、子どもたちが好む遊具として、「揺れる」要素の遊具（ブランコ、ホーススイング）は90%以上の回答があった。また、「回転する」要素の遊具も50%以上、学童保育所のアンケートでのみ実施した「落下や加速する」要素（滑り台やロープウェイ）も好むとの回答が多かった。よって、多くの子供たちは、揺れたり、回転したり、落下したりというスリルや刺激がある遊具を好むことが教育施設へのアンケートからも学童保育所の児童の回答からも分かった。

対して、大人が遊具に求める機能としては安全を担保する「手すりがある（約90%）」ことが最も多いという結果となった。「大人が付き添える（約80%）」などの介助者が安全を保障するための機能も需要が高い結果となった。「段差が低い（約60%）」、「背もたれがある（50%）」などの子どもの身体機能を補う要素も重要であるという結果になった。大人が付き添えるスペースの確保やスロープや段差の低いステップの通路を活用し、子どもたちが自発的に滑り台の上部に行けるようになっていたり、移動距離は長くなるがスロープや低い段差で構成されているルートと段差が大きいが短距離のルートの2ルートが設定されていたりするなどの工夫も必要となることも公園設置者への取材や現地での調査の結果からも分かっている。よって、遊具には子どもの好む刺激的な要素があること、どの子どもも安全に遊べることを担保する機能、車椅子の介助者などが付き添えるようにするための広いスペースを確保すること、そして身体能力の個体差を補うための手すりや段差の低いステップなどの補助的な機能などを複合的に含んだ遊具の設置が求められると考える。特別支援学校などの施設に通うハンディキャップのある子供たちは遊具や遊び道具を活用する遊びの人気が高いが、幼稚園や学童保育に通うハンディキャップのない子供たちは遊び道具のある遊びも好むが、鬼ごっこや追いかけてっこなどの何もないところで行い、自分たちでルールを作り出す遊びも好むことが分かった。追いかけてっこやボール遊びなどのできる広いスペースの確保も必要と感じた。また、学童保育に通うハンディキャップのない子供たちは年少期にはふわふわドーム（トランポリン）、ロープウェイなどの感覚に刺激を受ける遊びを好み、鬼ごっこなどで遊ぶことを好むが、年齢が上がるとゲームや動画視聴などの屋内で行う遊びに好みが変わり、屋内で過ごすことを好む傾向になることもわかった。そのため、小学校高学年以上の子どもが好むバスケットボール、サッカー、野球、ドッジボールなどの球技ができるスペースの確保が、年齢の高い子どもが公園を来訪するためのポイントとなることが考えられる。

#### 4. 提案

私の自宅近隣にある神奈川県立平塚商業高校が令和2年3月で近隣の神奈川県立平塚農業高校と統合され、閉校になった。現在は、体育館を活用して新型コロナ予防接種の大規模接種会場が設置されている。

今回、私が提案する「すべての人が気軽に来られるような公園」は、この閉校した神奈川県立平塚商業高校を有効活用し、人々が集まる仕掛けを多く取り入れ、人々が意識をせずに関わり会えるような公園を目指すものとする。

今回の事例検討や市役所への取材から、老若男女を集客する方法として、「訪れる必要性があること」、「訪れたいと思わせる場の設定をすること」、「その場所を選択し、訪れることへの利便性が高いこと」の3つの観点があるのではないかとわたしは考えた。

「訪れる必要性」という観点では、住民票の取得、納税の手続きや高齢者福祉サービスのなど各種申請など、生活に欠かせない市役所の市民窓口の機能がある。また、保育園や学童保育所、高齢者向けの福祉サービスなども定期的な利用の必要性に該当する。今回は、現存する校舎をそのまま活用し、1階に高齢者向けデイサービスセンターや保育園を設置し、上階に学童保育所や市役所の「市民窓口」を設置する。

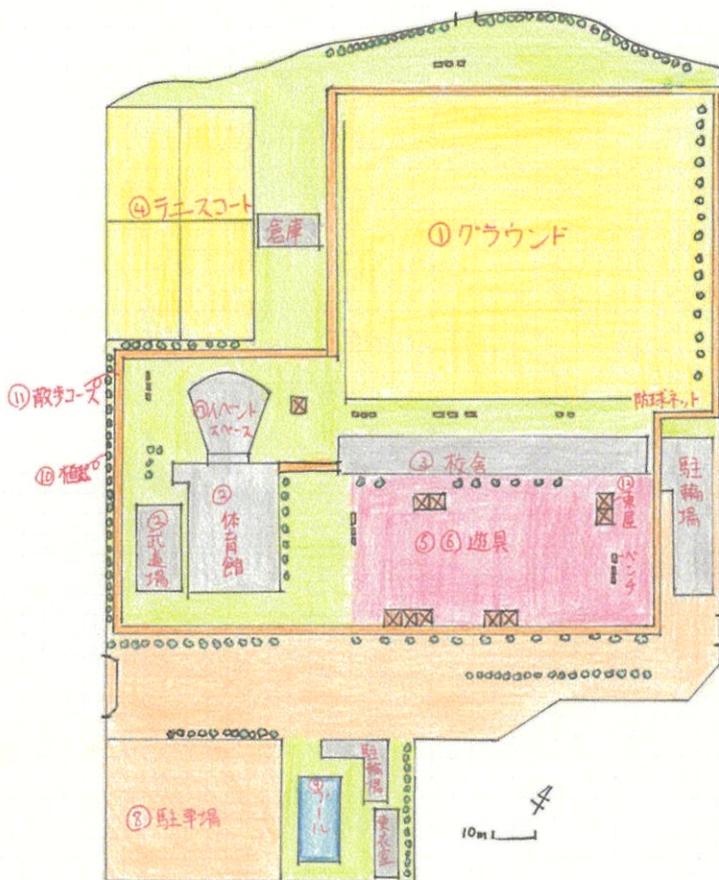
「訪れたいと思わせる場の設定」という観点では、地域住民のための社会教育に推進するために住民の教養の向上、健康の増進、情操の向上を図り、生活文化の振興、社会福祉の増進などに寄与することが目的である公民館としての機能が重要であると考え。そのため、校舎の上階に公民館を設置していきたい。また、幼児を対象とした遊具の設置や成人を対象とした健康遊具、小学生から高校生を対象としたバスケットボールや野球、ドッジボールなどの球技ができる広場、花見や季節を楽しめる植栽、校舎や広場の外周を活用したランニングや散歩を楽しめるコース設定をすることで、継続的な利用を狙う。そして、期間限定や単独開催になるが、小さい子供を持つ親、小中学生など、就労している世代、60歳以上の趣味や社会貢献活動などの興味関心の充実を図り始める世代、健康増進に関心を持った人が多い高齢の世代などのさまざまなニーズにあわせたイベントの開催に体育館や武道場、屋外に新規に設置するイベントステージを活用する。イベントの開催は、それまでその公園に興味を持っていなかった人がイベントというソフト面に興味を示すことで、公園を利用するきっかけを提供することができる。

訪れたいと思わせる場の設定としては、人々の交流も重要である。訪れた人々同士で交流が生まれ充実した時間を過ごすことができれば、交流を目的として訪れる人も多く存在するのではないかと考える。ランニングや散歩を行うことができるコースや花見ができる植栽などは、場の共有により、他の世代との交流が発生することができるし、学童保育所や保育園と高齢者デイサービス事業所を同じ敷地に設置することで日常的な多世代での交流を狙うことができる。また、イベントの開催により、日常的に公園を利用している人と新規利用者の交流も望むことができる。

「その場所を選択し、訪れることへの利便性」としては、一つの目的だけが達成されるのではなく、ショッピングモールのように複数の目的が達成されること、必要に迫られて利用するが付随して娯楽に触れることができること、などの要件があるのではないかと予想している。「住民票の取得のために『市民窓口』を訪れた帰りに花見をして帰る。」、「家族で来訪し、父は市役所で手続きを行い、母と子供は遊具で遊ぶ。」「学童保育に通所し、敷地内で開催されている囲碁教室に参加する。」などが考えられる。また、公共交通機関が充実していること、駐輪場や駐車場などの移動手段が確保されていることも必要である。高齢者及び歩行や移動に配慮を要するハンデキャップのある子とその親にとって、移動手段を選択できることは重要であることは市役所への取材や事例検討によって明らかになっている。

幼少期から多様性に触れる機会の提供という目的は、まず、そこにあるインクルーシブ遊具や施設でのイベントを通して同世代ではあるが多様な子どもたち同士の交流を生むことにより達せられる。そして、子どもたちだけではなく、すべての世代の人々がこの公園を訪れることで、多様な人々との交流が活発になり、公園を起点としたインクルーシブな社会の構築することができると思う。

以上の理由で、旧神奈川県立平塚商業高校を活用し、上記の3つの観点を踏まえた『みんなのこうえん』と名付けたインクルーシブな社会を構築する起点となる公園を整備することを提案する。



- ① グラウンド：小学校低学年以下の子供たちが鬼ごっこやキャッチボールができるフリースペースとなる。小学校高学年以上が好むバスケットボールやサッカー、野球などを行うことができる。
- ② 体育館・武道場：緊急時に避難所として使用。屋内イベントの実施、スポーツ団体の貸出を実施する。
- ③ 校舎：公民館、市役所、学童保育、保育所、高齢者デイサービスを設置する。小規模イベント開催や音楽室でのバンドや合唱練習、会議室としての貸し出しも可能である。
- ④ テニスコート：テニス教室や大会の試合会場として活用する。
- ⑤ インクルーシブ遊具：障がいのある子どもも含めてすべての子どもが関われるようにする。
- ⑥ 健康遊具：中高年を対象として
- ⑦ 屋外イベントスペース：校舎で音楽の練習をしているような人たちが発表をする場として活用。体育館にあるピアノを出してストリートピアノとしても活用可能である。

- ⑧ 駐車場：ハンディキャップのある子供は車椅子ではなくても、安全に気を付けて歩いて移動することは難しい。アンケートをとったアグネス園では、実際に、道路を挟んですぐ隣の公園に行く親子遠足であっても、遠足実施の1ヶ月以上前から往復の移動について不安の声が挙がるという。そのため、駐車場から遊具までの距離はできるだけ最短に、そして跳び出して事故にならない程度の距離に設置する。
- ⑨ プール：夏期に水深を下げて開放したり、カヤック体験や水中ロボット教室や水難事故防止教室などのイベントに活用する。
- ⑩ 植栽：桜の時期の花見や銀杏や紅葉、クリスマスでの装飾など季節ごとの美しさを鑑賞できる場とする。
- ⑪ 外周コースの設置：ランニングや散歩のコースとして活用し、継続的な利用を狙う。
- ⑫ 東屋 交流、休息の場として設置し、多様な交流の場となることを狙う。

## 参考文献

- ・みーんなの公園プロジェクト。  
すべての子供に遊びをーユニバーサルデザインによる公園の遊び場づくりガイドー。萌文社, 2017.
- ・公園のユニバーサルデザイン研究チーム。公園のグッドプラクティスー新しい公園経営に向けてー。鹿島出版会, 2018.
- ・柏原士郎。よくわかるユニバーサルデザインー考え方から社会の広がりまでー。株式会社 PHP 研究所, 2019 三井不動産株式会社 S&E 研究所.
- ・パブリックコミュニティー居心地の良い世界の公共空間《8つのレシピ》。株式会社宣伝会議, 2020 忽那裕樹・平賀達也・熊谷玄・長濱伸貴・篠沢健太.
- ・図解パブリックスペースの作り方ー設計プロセス・ディテール・使いこなし。株式会社学芸出版社, 2022 林まゆみ・金子忠一・西山秀俊.
- ・パークマネジメントがひらくまちづくりの未来。株式会社マルモ出版, 2020
- ・広島県危機管理監減災対策推進担当。“私たちはなぜうまく避難できないのだろう”。広島県, 2019 (2022.10)
- ・スポーツ庁政策課学校体育室。“幼児期の運動に関する指導参考資料 [ガイドブック] 第1集ー体を動かす中の事故事例と対策ー”。文部科学省, 2015 (2022.10)
- ・平塚市。“4月定例市長記者会見”。2022年4月 (2022.10)
- ・豊島区。“としまキッズパーク”。2020年 (2022.10)
- ・藤沢市。“誰もが遊べる、インクルーシブな遊具が完成しました”。2022年 (2022.10)
- ・宮古市。“うみどり公園”。2022年8月。 (2022.10)